



Title	時空と認知の言語学XIV（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2025, 2024
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/102271">https://hdl.handle.net/11094/102271</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト 2024

## 時空と認知の言語学XIV

田村 幸誠

松浦 幸祐

春木 仁孝

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2025



言語文化共同研究プロジェクト 2024

時空と認知の言語学 XIV

目次

松浦幸祐・田村幸誠  
日本語の母音融合に関する認知・機能音韻論的一考察  
-ai, ui, oi の融合に見られる分布の偏りに着目して-.....1

春木仁孝  
Rue X 構文：現代フランス語における前置詞を取らない場所名詞について  
on est arrivé rue Vaugelas.....11

# 日本語の母音融合に関する認知・機能音韻論的一考察 —ai, ui, oi の融合に見られる分布の偏りに着目して—

松浦幸祐\* 田村幸誠\*\*

## 1. はじめに

本稿の目的は、認知言語学の機能的 (functional) な言語観が音声・音韻分野の議論においても有効に働くことを、日本語の母音融合 (vowel coalescence) 現象、特に、ai, ui, oi の母音融合が示す分布傾向の分析を通して示すことにある。日本語には、(1) に見られるように、母音融合、すなわち「連続する二つの母音が単一の母音にまとまる現象」(窪田 1999: 97) が観察される。先行研究では、このような母音の融合パターンを、連続する母音の分節素性によって一般化および定式化しているが、その一方で、例えば (2) のように、同じ母音の連続であっても融合の起こらない場合があること、言い換えれば、融合の発生に分布の偏りがあることは、それほど関心が持たれておらず、十分な議論がなされているとはいえない。本稿では、先行研究に残された以上の課題を背景に、「ai, ui, oi の母音融合が形容詞 (特に、起伏型の音調を持つもの) の語尾部分に集中して生じる傾向が見られるのはなぜか」という論点について議論を行うものである。具体的には、杉藤 (1987) による実験結果などを基に、起伏型形容詞の語尾部分は、胸骨舌骨筋 (sternohyoid; SH) の動きに逆らう、発音上の負荷が生じる環境になっており、その負荷を軽減しようとする動機が働くためであるという分析を提案する。

- (1) a. このラーメン、うめえなあ。(umai ~ umee) (作例)  
b. 今日、思ってたよりさみいね。(samui ~ samii) (作例)  
c. フルマラソン完走なんて、すげえじゃん。(sugoi ~ sugee) (作例)
- (2) a. ?この仕事はずいぶん難しいいれえ (依頼) だ。(irai ~ ?iree) (作例)  
b. ?実験するときは、はきい (白衣) を着てくださいね。(hakui ~ ?hakii) (作例)  
c. ?嫌なあいつに、のれえ (呪い) でもかけてやりたいよ。(noroi ~ ?noree) (作例)

以下、第2節で、認知言語学における機能主義の考え方を振り返る。その上で、第3節において、母音融合の主要な先行研究 (窪田 1999、Kubozono 2015、小野 2001, 2004) を概観し、その課題として、ai, ui, oi の母音融合が有する上記の分布傾向を含めて説明する必要があることを確認する。第4節では、ai, ui, oi の母音融合が有する分布に関する機能的説明を提案し、その理論的含意として、ai, ui, oi の母音融合が現代日本語の共時態における母音連続の中で音韻化 (phonologization/phonemicization; Hyman 2013) の一段階として位置付けられることを示す。第5節はまとめである。

## 2. 理論的背景：機能主義的言語観

本節では、認知言語学の基本的な考え方である機能主義的言語観について、特に、それが音声・音韻の研究にどのような意義を有するかに着目しながら振り返る。ここでの「機能的 (functional)」とは、図1や図2のように、あるドメイン (domain) の値が、異なるドメイン (co-domain) の値と写像 (mapping) の関係にあることを意味する (Lakoff 1993: 118)。そのような対応を持つ基本的な例として、数学における関数 (function) が挙げられる (図1)。例えば、 $y = 3x + 1$  によって定義される関数  $f$  を考えた場合、この関数  $f$  は、ドメイン  $X$  における  $x = 1, 2, 3, \dots$  という値が、ドメイン  $Y$  においてそれぞれ  $y = 4, 7, 10, \dots$  という値と写像的対応 (一対一の関係を作ること) を有するのと同義であると見ることができる。

\* 大阪大学 日本語日本文化教育センター; e-mail: matsuura.kosuke.cjlc@osaka-u.ac.jp

\*\* 大阪大学 人文学研究科 言語文化学専攻; e-mail: tamura.yukishige.hmt@osaka-u.ac.jp

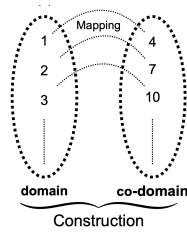


図1：関数  $y = 3x + 1$  における写像関係

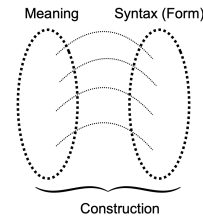


図2：意味と形式における写像関係

このような考え方は、認知言語学の中でも、とりわけ意味と形式の関係を分析・考察する際に典型的に採用されてきた。それは、図2のように、意味ドメインにおける特定の値（すなわち、概念化を経た具体的な意味や状況）に対して、形式ドメインにおける特定の値（すなわち、具体的な構文の形式）が対応関係を有するという考え方にに基づき、形式ドメインでの現象（例えば能動構文と受動構文の形式的な違い）を意味ドメインにおける動機づけ（事態における意味の焦点の違い）から説明しようとする分析のことである。（詳しくは田村・松浦 2024 も参照されたい）。

本稿では第4節で母音融合に対して機能的説明を試みるが、そこでの機能的説明とは、上記の考え方で音声と音韻の関係を捉えることを意図している。つまり、図3のように、音韻ドメインでの値（すなわち、カテゴリとしての音韻）が音声ドメインでの値（すなわち、音の物理的・生理学的側面）と対応関係を有するという考え方にに基づき、音韻現象（本稿では母音融合）を音声ドメインにおける動機づけ（本稿では調音運動における生理的負荷など）から説明しようとするものである<sup>1</sup>。

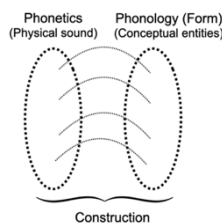


図3：音声・音韻における写像関係

### 3. 母音融合に関する先行研究

母音融合に関する主要な先行研究は、前節の観点で大きく分けると、音韻ドメイン内部での理論化を試みるもの（窪菌 1999, Kubozono 2015）と、音声ドメインとの対応も示唆するもの（小野 2001, 2004）の2つに分けられる<sup>2</sup>。以下、3.1.1 節で前者を、3.1.2 節で後者を概観し、3.2 節では、両者に共通して残されている課題と、それを踏まえた本稿の論点を明確にする。

#### 3.1.1 音韻ドメインの問題としての理論化

母音融合に関して最も代表的な研究である窪菌の研究（窪菌 1999, Kubozono 2015）では、母音融合を専ら音韻素性の計算として（第2節の言い方言えば、音声ドメインとの対応にそれほど踏み込まずに）理論化している。具体的には、窪菌は、日本語の5つの母音を（3）の素性によって表示することで、母音の融合パターンを（4）のように一般化できると主張し、その一般化を（5）の形で定式化している<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> 言うまでもなく、ここでは、文法における意味と音韻を平行に捉える考え方、すなわち、記号的文法観（symbolic view of grammar; Langacker 1987, 2008 など）が背景となっている。田村・松浦（2024）では、この観点から日本語の母音無声化に伴うアクセント核の移動について考察した。

<sup>2</sup> ほかに、母音融合の江戸～現代語における拡散・収縮の実態や、その背景にある社会言語学的要因を検討する研究として、福島（2002）がある。

<sup>3</sup> 窪菌（1999）では、/a/ の素性は [-high, +low, -back] とされている（窪菌 1999: 101）。以下で見る（7e）

- (3) a. /i/ [+high, -low, -back]  
 b. /u/ [+high, -low, +back]  
 c. /e/ [-high, -low, -back]  
 d. /o/ [-high, -low, +back]  
 e. /a/ [-high, +low, +back] (Kubozono 2015: 178)
- (4) 「二つの母音 (V<sub>i</sub>V<sub>j</sub>) が融合する場合には、V<sub>i</sub> の [high] の特徴と、V<sub>j</sub> の [low] および [back] の特徴が組み合わさった音となる。」(窪田 1999: 102)
- (5) [ahigh, δlow, εback] [çhigh, βlow, γback] → [αhigh, βlow, γback] (窪田 1999: 103, 下線は原文による)

例えば、(1a) の ai が ee になる変化であれば、計算は (6) の通りになる。すなわち、V<sub>i</sub> である /a/ の素性 [-high, +low, +back] のうち [-high] と、V<sub>j</sub> である /i/ の素性 [+high, -low, -back] のうち [-low] および [-back] が組み合わさり、出力として [-high, -low, -back] つまり /e/ が融合されることを予測する。

- (6) [-high, +low, +back][+high, -low, -back] → [-high, -low, -back]

ここで、窪田の議論を理解する上で留意しておきたい点として、(4) で「二つの母音融合する場合には」と前置きしている点からも分かるように、窪田の関心はあくまで母音融合が生じる場合に限定されているということがある。言い換えれば、(4) (5) の一般化は、個別の語や環境において実際に母音融合が生じるかどうかや、あるいは、そもそも母音融合がなぜ生じるのか (あるいは生じないのか)、という問いは元から議論の射程に含まれていないとも言える<sup>4</sup>。

### 3.1.2 音声ドメインとの対応関係の示唆

続いて、音韻ドメインと音声ドメインの対応関係に着目する必要性を示唆していると思われる研究として、小野 (2001, 2004) を確認しておく。小野は、窪田による議論が母音融合の生じない場合を考慮に入っていない点を批判した上で、母音融合の理解には、聞こえ度の階層 (sonority hierarchy) が重要な要因となることを主張している。以下で見ていく小野の理論化も、基本的には音韻ドメイン内部での議論を念頭に置いているが、母音の聞こえ度が口腔の開大度 (openness) という音声ドメインの要因に対応する (cf. Kubozono 2015: 174) と考えた場合、その議論は機能的な発想に近付いているとも言える。

小野による窪田批判の焦点は、(4) (5) の一般化が、実際には生じない (7) の結果を過剰生成してしまうという点にある<sup>5</sup>。例えば、(7a) の /ie/ は、(5) に基づいて計算を行うと /i/ が出力として得られるため、/ie/ は /i/ に融合することが予想されるが、実際には、(7'a) や (7'b) に見られるように、そのような母音融合は生じないということである ((3) に合わせる形で一部表記に修正を加えた。また、(7e) については、窪田 1999 では例が挙げられていなかったが、4.2 節の (14m) で見るように、Kubozono 2015 では「このあいだ→こないだ」が挙げられている)。

- (7) a. /ie/ [+high, -low, -back] [-high, -low, -back] → \* [+high, -low, -back] = /i/  
 b. /io/ [+high, -low, -back] [-high, -low, +back] → \* [+high, -low, +back] = /u/  
 c. /ue/ [+high, -low, +back] [-high, -low, -back] → \* [+high, -low, -back] = /i/  
 d. /uo/ [+high, -low, +back] [-high, -low, +back] → \* [+high, -low, +back] = /u/  
 e. /oa/ [-high, -low, +back] [-high, +low, -back] → \* [-high, +low, -back] = /a/ (小野 2004: 109)

で /a/ が [-back] になっているのはこのためである。

<sup>4</sup> 類似の指摘は稲田 (2008) にも見られる。なお、窪田 (2019) では、母音融合について「口の構えを変える労力を省くため」や「発音上の省エネ」とも記述されているが、概説書ということもあり、その具体的な機序については触れられていない (窪田 2019: 18)。

<sup>5</sup> 厳密に言えば、前節の最後で確認したように、窪田の議論では母音融合が実際に生じるかどうかは元から議論の対象ではないため、小野による指摘は、窪田への批判としては成立していない。

- (7') a. ピエロ (piero) → \*ピーロ (piiro)  
 b. 消える (kieru) → \*きいる (kiiru)

上記の問題点に対して、小野は、母音融合が可能な母音の組み合わせは、聞こえ度の階層に関する (8) の制約に違反しない点が共通することを指摘している。なお、小野による日本語の母音における聞こえ度の階層を (9) に示す。本稿冒頭で挙げた (1) も、(8) (9) に違反していないことを確認されたい。

- (8) 「母音融合において聞こえ度は上昇してはならない。」(小野 2004: 110)  
 (9) 日本語の母音の聞こえ度 : [a] > [o, e] > [u, i] (小野 2004: 110)  
 (1) a. このラーメン、うめえなあ。(umai ~ umee)  
 b. 今日、思ってたよりさみいね。(samui ~ samii)  
 c. フルマラソン完走なんて、すげえじゃん。(sugoi ~ sugee) [再掲]

先にも述べたように、小野による以上の指摘は、本稿の観点から言えば、母音融合という音韻現象が、口腔の開大という音声学の現象に動機づけられていることを示唆しているとも解釈できる。その一方で、次節では、小野の分析によっても説明できない分布上の特徴が ai, ui, oi の母音融合には観察されることを見る。

### 3.2 先行研究に残された課題：分布に見られる偏り

先行研究は、母音をいくつかの素性、特に、分節的な素性（母音の素性と聞こえ度）に還元させて議論を行っているため、母音融合をシンプルな形で記述・理論化できる点で有用であるが、他方、以下で見ていくように、実際の言語使用における発音運動の中で関わってくる他の要素の影響が見落とされているようにも見える。ここでは具体的に、ai, ui, oi の母音融合が起伏型の形容詞 (LH...HL; 例えば「うまい LHL」) に集中して生じる分布傾向が観察されることを示した上で、この分布を説明するためには、母音融合に対応する音声ドメインの要因として、口腔の開大だけでなく、ピッチの動きも考慮に入れなければならないことを指摘する。

まずは、ai, ui, oi の母音融合が起伏型の形容詞に集中している事実を確認しておこう。この3つの母音融合が形容詞に偏って発生することは、Kubozono (2015: 168) などの先行研究でもすでに指摘がある。試みに、手元の辞書<sup>6</sup>にある見出し語のうち、ai, ui, oi を含む3モーラの語（合計 1,295 語）を調査してみると、そのうち母音融合が生じ得る語はわずか 64 語（全体の 4.9% 程度）であるのに対して、そのうち9割以上に当たる 58 語が形容詞であった（例を (10) に示す）。なお、母音融合が生じ得る 64 語のうち、形容詞ではない6語<sup>7</sup>は、「違い」「大の」「入る」「大事」「大工」「(...せざるを) 得ない」である。

- (10) a. 母音融合が生じない語：擬態 (gitai ~ \*gitee)、緋鯉 (higoi ~ \*higee)、ついで (tuide ~ \*tiide)  
 b. 母音融合が生じ得る語：臭い (kusai ~ kusee)、細い (hosoi ~ hosee)、熱い (atui ~ atii)

次に、形容詞の中でも音調型によって母音融合の偏りのあること、特に、起伏型の形容詞では母音融合が生じやすいことを観察するために、表1を見てみよう。表1は、日本語の話し言葉コーパス<sup>8</sup>に含ま

<sup>6</sup> デスクトップアプリ「辞書 by 物書堂」を用いて、『三省堂 新明解国語辞典 第八版』のデータを検索した。また、アクセントの情報も同データによる。1つの語に複数のアクセントが記載されている場合、1つ目の方を採用した。なお、母音融合が生じ得るかどうかの判断は筆者の内省による。

<sup>7</sup> 筆者にとっては、いずれも役割語（金水 2003, 2014 など）としての用法、例えば＜江戸ことば＞のような言い方をかなり強く喚起させるが、その一方で (10a) の各例よりは自然であるという側面もあるため、ここではゆるく「容認可」とした。

<sup>8</sup> コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて、「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」と「名大会話コーパス (NUCC)」に含まれる形容詞を検索した。アクセントの情報は、電子辞典の『スーパー大辞



れる形容詞 240 語を対象として、音調型が起伏型 (LH...HL; 例えば「うまい LHL」「ありがたい LHHHL」) か平板型 (LH...HH; 例えば「軽い LHH」「明るい LHHH」) か、母音融合が可能か不可能か<sup>9</sup>を調査した結果である。起伏型の形容詞 207 語のうち 129 語が母音融合を生じ得るのに対して、平板型の形容詞 33 語では 13 語しか母音融合を生じないことが分かる。これら 2 つの群におけるオッズ比<sup>10</sup>は 2.54 (95% 信頼区間は [1.20, 5.40]) であるため、統計的には、起伏型の方が平板型より約 2.5 倍、母音融合が生じやすいと言える (カイ二乗検定の結果は  $p=0.00128<0.05$ )。 (11) にそれぞれの例を示す。

	母音融合可能	母音融合不可	合計
起伏型 (LH...HL)	129	78	207
平板型 (LH...HH)	13	20	33
合計	142	98	240

表 1 : 形容詞における音調型と母音融合の可否の関係

- (11) a. 起伏型・母音融合可能: 痛い, 生ぬるい, 面白い...  
b. 起伏型・母音融合不可: けばい, がめつい, うとい...  
c. 平板型・母音融合可能: 硬い, 軽い, 遅い...  
d. 平板型・母音融合不可: 重い, 危うい, どぎつい...

以上の事実を踏まえると、母音融合の発生分布には、明らかにピッチが要因として関わっていると思われるが、この事実が先行研究にとって問題となるのは、(12) (13) のように、母音の分節素性が同じであっても、アクセントの違いによって母音融合が生じるものと生じないものが出てくる点である。例えば、(12a) の「遠い」は、oi の母音連続を有する点で、「すごい」などと同様に、小野の (8) (9) の制限には違反せず、窪菌の (5) で計算すれば /e/ が出力されるが、実際には「とええ」とはならない。また、(12b) 「厚い」は母音融合を生じにくい、これに対して、アクセントのみ異なる「熱い／暑い」は、母音融合が可能である。これらのペアにおける母音融合の可否の差は、母音の分節特性のみで母音融合を理論化しようとする方法では説明が与えられないと考えられる。

#### (12) 東京弁で母音融合が生じない例 vs. 生じる例

- a. 遠い (tooi LHH) → \*とええ (toee) vs. すごい (sugoi LHL) → すげえ (sugee)  
b. 厚い (atui LHH) → \*あちい (atii) vs. 熱い／暑い (atui LHL) → あちい (atii)

さらに、日本語の変種も説明対象に含めるためには、やはりピッチを考慮に入れる必要があると思われる。関西弁の形容詞は、音調型が原則的に H...HLL のみ (例: つらい HLL、たのしい HHLL など)

林 (三省堂)』による。なお、2 つ以上のアクセントが記載されているものについては、1 つ目のものを採用した。

<sup>9</sup> 母音融合が生じ得るかどうかの判断は筆者の内省による。また、ここでは、脚注 7 で述べたような、現代語で聞き馴染みのない形式は「不可」として数えている。

<sup>10</sup> オッズ比 (oddsratio) は、ある事象のオッズ (その事象が起こる確率と起こらない確率) を 2 つの群で比較して示す統計学的な尺度である。具体的には、事象が第 1 群で生じる確率を  $p$ 、第 2 群で生じる確率を  $q$  とすると、それぞれのオッズは  $p/(1-p)$ 、 $q/(1-q)$  であり、オッズ比は  $(p/(1-p))/(q/(1-q))$  によって求めることができる。表 1 で言えば、母音融合が「起伏型」の群で生じる確率は  $p=129/207$ 、母音融合が「平板型」の群で生じる確率は  $q=13/33$  となり、それぞれのオッズは  $129/78$  および  $13/20$  となり、その比がオッズ比となる。また、オッズ比の 95% 信頼区間に 1 が含まれない場合、2 つの群の間で事象の生起に統計的に有意な差があるとされる (オッズ比が 1 であることは、2 つの群において事象の起こりやすさに差がないことを意味する)。その点から言えば、本稿のようなカイ二乗検定の実施は、実際には余剰である (95% 信頼区間に 1 が含まれていない時点で統計的に有意な差があることは主張し得る) とも言える。なお、表 1 の各セルにおける期待度数はいずれも 5 以上である。

<sup>11</sup> 例外としては「おいしい (LLHL)」が挙げられる。また、2 拍の形容詞には LH となるものもある。

であり、ai, ui, oi に当たる部分のピッチには LL が当たるが、(13) に見られるように、関西弁の形容詞では母音融合が生じない傾向が広く観察される<sup>12</sup>。

(13) 関西弁 vs. 東京弁

- a. うまい (umai HLL) → \*うめえ (umee) vs. うまい (umai LHL) → うめえ (umee)
- b. さむい (samui HLL) → \*さみい (samii) vs. さむい (samui HLL) → さみい (samii)
- c. ひどい (hidoi HLL) → \*ひでえ (hidee) vs. ひどい (hidoi HLL) → ひでえ (hidee)

#### 4. 考察

本節では、機能主義的言語観、すなわち、音声ドメインとの対応関係から音韻現象を分析、考察することの有用性を見ていこう。以下、4.1 節では、ai, ui, oi の母音融合が有する分布傾向について、音声ドメインにおける要素として、胸骨舌骨筋 (sternohyoid; SH) という筋肉の働きを理解することで適切に説明できることを示す。4.2 節では、本稿の提案が有する理論的含意として、ai, ui, oi の分布傾向が現代日本語の共時態における母音融合全体の中で有する位置付けについて考察する。

##### 4. 1 母音融合に対する機能的説明

それでは、ai, ui, oi が起伏型形容詞に集中して生じる理由について、機能的観点から説明を試みる。以下、胸骨舌骨筋の働きによって口の動きとピッチの動きに不連動が生じることを、杉藤 (1982) の実験結果から確認した上で、その不連動を避けようとする動機こそが、ai, ui, oi の母音融合を引き起こす要因であることを示す。つまり、ai, ui, oi の母音融合という音韻現象を適切に捉えるためには、それに対応する音声ドメインの要素として、口の狭め・広めとピッチの動きが相互に影響し合うことを理解しておく必要があることを考察する。

以下の議論のために、まずは、杉藤 (1982) による研究として、口の広げ・狭めとピッチの上げ・下げに連動・不連動が観察されることを見ておきたい。ここでの杉藤の研究の要点は、連続する母音を発音する際、口の広げ、狭めとピッチの組み合わせによっては、胸骨舌骨筋 (図 4) と呼ばれる筋肉の動きによって、円滑な調音が実現する場合としない場合があるという点にある。

胸骨舌骨筋の動きが口の広狭とピッチの高低に影響することを具体的に理解するために、図 5 の 4 つのスペクトログラムを見てみよう。図 5 の各グラフは、上半分が狭帯域スペクトログラムでピッチの変化を示し、下半分は広帯域スペクトログラムでフォルマントの遷移を示している。各グラフを見て分かるように、図 5a, b, c では、ピッチの変化開始時点 (Pt) とフォルマントの遷移開始時点 (Ft) にズレが生じているのに対して、図 5d ではそのズレが生じていない。杉藤は、この差を生む要因を胸骨舌骨筋の働きであると分析している (杉藤 1982: 260)。すなわち、胸骨舌骨筋は、顎の開大・舌の下げとピッチの下げの両方に関わる筋肉であり<sup>13</sup>、それゆえ、図 5d のような、舌を下げながらピッチを下げる組み合わせ (ei, HL) においては、調音が円滑に連動できる (スペクトログラムで言えば、Ft と Pt が同時に起こる)。これに対して、図 5a から図 5c では、口の動きやピッチの動きによって、胸骨舌骨筋の動きに対して何らかの不連動が生じると考えられ、例えば図 5a では、Pt と Ft の間にズレが (杉藤によれば 100ms ほど) 生じているのが分かる。同様に、図 5b でも、Ft と Pt との間に図 5a の半分ほどのズレが生じており、図 5c では、ごくわずかではあるものの、Pt の方が Ft に先行しているのが分かる。

---

例：無い (LH)、よい (LH)

<sup>12</sup> 興味深いことに、同じ関西・近畿地方の方言であっても、アクセントパターンが東京式である丹後弁では、形容詞の語尾部がアクセント核を持つことがあり、その場合には「厚い (LHL) → あちい」のように、母音融合が生じ得るという (p.c. 木本幸憲氏。例も木本氏にご教示いただいた)。

<sup>13</sup> 同様の記述は Marchal (2009) にも見られる。



図4：胸骨舌骨筋（SH）  
（杉藤 1982: 217）

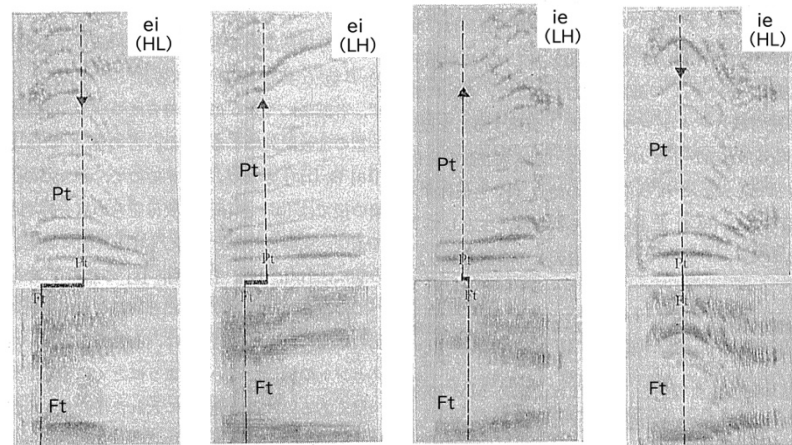


図5. 音調 (Pt) と調音 (Ft) の時間関係 (杉藤 1982: 252 に加筆)

杉藤による以上の分析を踏まえると、日本語の ai, ui, oi における母音融合が起伏型形容詞の語尾部に集中して生じるのは、調音上の労力軽減という音声学的要因に動機づけられているためであると説明ができる。つまり、母音融合が生じる形容詞（例：うまい）の語尾部では、表2のように、調音変化とピッチ変化のズレが大きい図5aのような環境（調音運動の観点から言えば、胸骨舌骨筋の運動に逆行する、負荷のかかる調音運動）が生じており、このズレを解消する動機が働くために、調音の変化をなくした、母音を融合させた発音になると説明を与えることができる。

	うまい (umai, LHL)		うめえ (umee, LHL)
調音変化	あり (a → i)	>	なし (e)
ピッチ変化	あり (H → L)		あり (H → L)

表2：うまい → うめえの母音融合

また、これに対して、平板型形容詞の語尾部では、表3で示したように、調音の変化のみが生じ、ピッチの変化が生じていない（Pt と Ft のズレがそもそも生じない）環境になっており、そのため、母音融合を生じる動機がそれほど高くないと考えることができる。また、関西弁の形容詞では母音融合が生じにくい傾向があることも、関西弁の形容詞では語尾部のピッチが基本的に LL になっていることを考えれば、表3と同様、融合を生じる動機があまり高くないためだと自然な説明を与えることができる。

	厚い (atui, LHH)		
調音変化	あり (u → i)	>	*あちい (atii)
ピッチ変化	なし (HH)		

表3：厚い → \*あちいの母音融合（東京弁）

	すごい (sugoi, HLL)		
調音変化	あり (o → i)	>	*すげえ (sugee)
ピッチ変化	なし (LL)		

表4：すごい → \*すげえの母音融合（関西弁）

## 4. 2 本稿の議論が有する理論的含意

本節では、4.1 節の議論が有する理論的含意として、Hyman (2013) の音韻化 (phonologization/phonemicization) モデルを基に、ai, ui, oi の母音融合が現代日本語の共時態において占める位置について考察する。そのために、まずは Hyman のモデルについて確認しておこう。Hyman は、音声学的特徴が個別言語の音韻体系を構築していくプロセスの理解を精緻化するために、従来の「普遍

的な音声学 vs. 言語固有の音韻論」という二分法的な図式ではなく、その中間段階として、図 6b のように、「言語固有の音声学」の段階、すなわち、言語音に内在する物理的・生理学的特性が、個別言語の慣習として取り入れられる（例：英語では語頭で強勢の置かれた音節の頭子音にある **p** は通常帯気を伴う）という段階を設けている。そして、そのような慣習が取り入れられるプロセス（図 6 で言えば **a** から **b** へのプロセス）を **phonologization** と呼び、これに対して、**b** から **c** のプロセス、すなわち、個別言語で異音として生じていた特性が独立した音素へと変化するプロセス（例：タイ語では、帯気を伴う **p** は、環境によらず、帯気を伴わない **p** と対立を有する）のことを **phonemicization** と呼んでいる<sup>14</sup>。

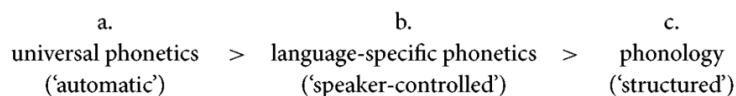


図 6. phonologization/phonemicization のプロセス (Hyman 2013: 7)

これを踏まえると、**ai, ui, oi** の母音融合が有する分布の偏りは、日本語において母音融合という音韻変化 (phonologization/phonemicization) が進行していくまさに途上段階の瞬間を捉えたものであると解釈できる。このことを理解するために、まずは、母音融合の全体像として、Kubozono (2015) による、(14) の 13 パターンの母音融合を観察してみよう<sup>15</sup>。なお、以下では Kubozono (2015) に倣い、すでに定着した変化を「→」、現代語における変異 (variation) を「~」と区別して議論を行う<sup>16</sup>。

- |  |   |
|--|---|
| <p>(14) a. /au/ → /o(o)/<br/>kyau → kyoo (京)</p> <p>b. /eu/ → /jo(o)/<br/>teuteu → tyootyoo (蝶々)</p> <p>c. /ou/ → /oo/<br/>touzai → toozai (東西)</p> <p>d. /iu/ → /juu/<br/>iu → yuu (言う)</p> <p>e. /ai/ ~ /e(e)/<br/>itai → itee (痛い)</p> <p>f. /ei/ ~ /ee/<br/>sensei ~ sensee (先生)</p> | <p>g. /ui/ ~ /i(i)/<br/>atui ~ atii (熱い/暑い)</p> <p>h. /oi/ ~ /e(e)/<br/>sugoi ~ sugee (すごい)</p> <p>i. /ae/ ~ /ee/<br/>kaeru → keeru (帰る)</p> <p>j. /oe/ ~ /ee/<br/>tokoe ~ tokee (とこへ)</p> <p>k. /eo/ ~ /o/<br/>miteokoo ~ mitokoo (見ておこう)</p> <p>l. /ea/ ~ /a(a)/<br/>miteageru → mitageru (見てあげる)</p> <p>m. /oa/ ~ /a/<br/>konoaida → konaida (このあいだ)</p> |
|--|---|

(例は Kubozono 2015: 176-177 より。漢字仮名交じり表記は窪菌 1999: 97-98 および本稿筆者による)

(14) の各パターンは、phonologization/phonemicization の進行度合という観点から見ると、表 5 の 4 つのグループに分けることができる。以下、各グループにおける進行の度合について、「音韻カテゴリとしての定着度」と「融合が可能な環境の広さ」という 2 点に着目して観察していこう。

<sup>14</sup> **p** の例は、田村 (2023) を参照。

<sup>15</sup> 第 3 節でも少し言及したように、窪菌による議論の眼目は、これら 13 パターンを統一的に一般化・定式化することであり、かつ、(4) (5) によってそれが可能になる点が、窪菌の研究が有する大きな功績の 1 つである。

<sup>16</sup> ただし、(14c) は、Kubozono (2015) では /ou/ → /oo/ とされているが、現代語で両者は変異/異音の関係であると考えられる。例えば「東西」は toozai と発音しても touzai と発音しても大きな意味の違いは生じず、その点において (14f) の「先生 (/sensei ~ sensee/)」と同様であると言える。このため、以下の表 5 を含む本稿では、(14c) を変異として扱っている。

	パターン	融合後の形式	頻度	母音融合可能な環境
A	a. /au/ → /oo/ b. /eu/ → /joo/ d. /iu/ → /juu/	音韻として対立	-	・環境によらず、融合前後の形式が対立する。 ・ただし、「言う (iu~juu)」のように、異音のものも一部存在する。
B	c. /ou/ ~ /oo/ f. /ei/ ~ /ee/	異音	c: 1373/1383 f: 721/740	・ほとんどの環境で可能 ・母音間の形態素境界や一部の外来語は除く
C	e. /ai/ ~ /ee/ g. /ui/ ~ /ii/ h. /oi/ ~ /ee/	異音	e: 31/904 g: 16/113 h: 17/278	・起伏型形容詞の語尾部に集中
D	i. /ae/ ~ /ee/ j. /oe/ ~ /ee/ k. /eo/ ~ /o/ l. /ea/ ~ /aa/ m. /oa/ ~ /a/	異音	i: 4/92 j: 0/40 k: 0/17 l: 0/27 m: 0/22	・ほとんどの語では不可 ・限られた語で散発的に生じる

表5：日本語の母音融合における phonologization/phonemicization の進行度合

まず、音韻カテゴリとしての定着という観点から見てみると、A と BCD に大きく分けることができる。A のグループは、母音融合を起こした形式が音韻カテゴリとして定着した、つまり、図6で言えば b の phonemicization の生じた段階にあると言えるのに対して、B, C, D のグループでは、母音融合後の形式があくまで異音、すなわち、母音融合する前の形式と大きな意味の違いを生じておらず、いずれも Hyman の phonologization の段階にある。例えば、A の /au/ → /oo/ に関して、現代語では「京」の読みは kyoo であって、これを kyau と発音しては意味が通じないのに対して、B の /ei/ ~ /ee/ では、「先生」を sensei と発音しても、sensee と発音しても、大きな意味の差は生じない。

次に、融合が生じる環境の広さに着目してみよう。前の段落で述べた通り、A の母音連続はすでに環境によらず融合前後の形式が意味の対立を有しているが、それよりも重要な点は、同じ phonologization の段階にある B, C, D について、融合が生じる環境に差が認められる、言い換えれば、phonologization が段階的に進む様子が観察されるという点である。この段階の違いを量的に理解するために、表5の「頻度」列を見られたい。この列の数値は、辞書の見出し語において当該の母音融合が可能な語がどれほどあるか<sup>17</sup>を示したものである。例えば B の /ou/ であれば、それを含む辞書の見出し語（例：「同時」「器用」）が全体で 1383 語あり、そのうちほとんど全ての 1373 語で母音融合が可能であることを示している。/ei/ も同様に、辞書の見出し語 740 語（例：「惰性」「経過」）のうち、721 語で母音融合が可能であり、ほとんど全ての語で母音融合が可能になっていると言える。融合が生じにくい少数の環境としては、ou や ei が形態素の境界を跨ぐもの（例：「夜討ち」「音色」）や、一部の外来語（例：「エイチ」）が見られたが、それ以外の環境（例えば「同時」や「惰性」）においては、ほぼ義務的に融合が生じ、むしろ、融合前の ou や ei で発音する方が、ある種の不自然さを感じられるようにも思われる。

続いて、本稿で詳しく扱った ai, ui, oi の3つは、表5の「頻度」を見てみると、いずれも融合可能な割合が非常に低くなっている。これは、すでに述べてきたように、ai, ui, oi の3つの母音融合が、起伏型形容詞の語尾部という環境に依存しており、他の環境ではほとんど生じない、言い換えれば、グループ C はグループ B に比べて、phonologization の定着・拡張が相対的に遅いグループであると言える。

最後に、グループ D は、表5の「頻度」を見て分かる通り、現代語においては、いくつかの限られた語しか融合が許されておらず、phonologization は散発的にのみ生じている状態であると言える。なお、(14i) の /ae/ で母音融合が可能となっている4語は、「帰る」「蛙<sup>18</sup>」「お前」「手前」であった。

本節のまとめとして、A から D のグループが phonologization/phonemicization の進行度合に関して段

<sup>17</sup> デスクトップアプリ「辞書 by 物書堂」を用いて、『三省堂 新明解国語辞典 第八版』のデータのうち、3モーラの語を検索した。母音融合の可否に関する判断は筆者の内省による。

<sup>18</sup> 筆者の内省では「蛙」を keeru とする発音は、「帰る (keeru)」に比べて容認度が下がるが、ここでは Kubozono (2015) の判断に従った。

階性を有することを、図7のスケールとして示す。

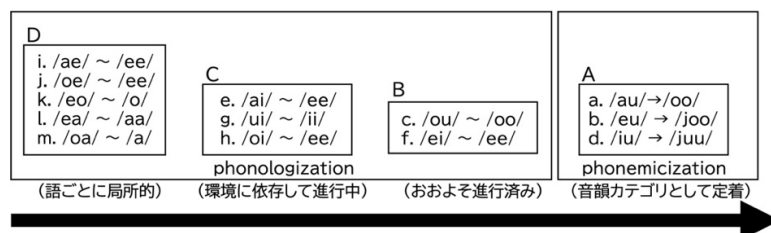


図7：母音融合における phonologization/phonemicization の進行度合い

## 5. おわりに

本稿では、日本語の母音融合に関して機能的分析を与えることを試みた。具体的には、ai, ui, oi の融合が起伏型形容詞の語尾に集中して生じる理由について、その環境に、発音上の負荷がかかる要因（胸骨舌骨筋の運動に逆らう発音運動）が備わっているためであるという分析を提案した。さらに、その理論的含意として、ai, ui, oi の融合は、日本語における phonologization/phonemicization の一段階として位置付けられると述べた。

## 参考文献

- 稲田俊明 (2008) 「日本語の母音融合に関する覚書」『文学研究』105: 39–59, 九州大学大学院人文科学研究院。
- 小野浩司 (2001) 「日本語の母音融合について」中右実教授還暦記念論文集編集委員会編『意味と形のインターフェース 下巻』885–896, くろしお出版。
- 小野浩司 (2004) 「日本語の母音融合と母音交替」『研究論文集』9(1): 107–115, 佐賀大学文化教育学部。
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』, 岩波書店。
- 金水敏 (2014) 『〈役割語〉小辞典』, 研究社。
- 窪田晴夫 (1999) 『日本語の音声』, 岩波書店。
- 窪田晴夫 (2019) 「音声素性と母音融合」窪田晴夫編著『よくわかる言語学』: 18–19, ミネルヴァ書房。
- 国立国語研究所 (2006) 「日本語話し言葉コーパスの構築法」国立国語研究所。
- 杉藤美代子 (1982) 『日本語アクセントの研究』, 三省堂。
- 田村幸誠 (2023) 「Profile からみた Phonologization: 認知言語学的視点からの音韻記述に関する「橋渡し」的考察」『大阪大学英米研究』47: 39–58。
- 田村幸誠・松浦幸祐 (2024) 「認知音韻論の発展に向けて: 日本語の VOT とアクセント移動を事例に」『時空と認知の言語学 XIII』21–33。
- 福島直恭 (2002) 『〈あぶない ai〉が〈あぶねえ e:〉にかわる時 —日本語の変化の過程と定着』, 笠間書院。
- 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法: データの収集と分析』: 43–72, ひつじ書房。
- Hyman, Larry M. (2013) “Enlarging the Scope of Phonologization”. In Alan C. L. Yu (ed.) *Origins of Sound Change: Approaches to Phonologization*, 3–28. Oxford: Oxford University Press.
- Kubozono, Haruo. (2015) “Diphthongs and vowel coalescence”. In Haruo Kubozono (ed.), *The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, 215–250. Berlin, München, Boston: de Gruyter Mouton.
- Lakoff, George (1993) “Cognitive Phonology”. In J. Goldsmith (ed.) *The Last Phonological Rules: Reflections on Constraints and Derivations*, 117–145. Chicago and London: Chicago University Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar vol.1: Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford: Oxford University Press.
- Marchal, Alain (2009) *From Speech Physiology to Linguistic Phonetics*, London: Wiley.

## Rue X 構文：現代フランス語における前置詞を取らない場所名詞について

on est arrivé rue Vaugelas

春木仁孝

### 1. はじめに

現代フランス語においては、emballage cadeau「プレゼント用包装」のように後置名詞が前置詞を取らずに先行の名詞を修飾する現象を初めとして、名詞が名詞本来の機能を越えた働きをする様々な現象が存在する。

筆者は春木(2016)などにおいて、côté nourriture「食べ物については」、question argent「お金に関しては」、des cheveux courts façon Jean Seberg「ジーン・セバーグのような短かい髪」、ses petites godasses genre tennis「テニスシューズのような彼女の小さな靴」、si on part genre demain「もし明日にでも出発すれば」など、名詞が文法化を経て前置詞的、さらには副詞的、ディスコースマーカー的な働きをする現象について詳しく考察した。また春木(2023)においては la moquette couleur pomme blette「熟れすぎたリンゴのような色の絨毯」のように色彩のニュアンスを導入する couleur について考察を加えた。以上の現象においてはいずれも前置詞の存在が想定されるところに、実際には前置詞と冠詞が用いられずに表現が成立するという特徴があった。

以上の現象とは性格を異にするが、現代フランス語には rue, place, boulevard などいくつかの場所を表わす名詞に関して、以下のようにやはり前置詞と冠詞が省略されたように見える表現形式が存在している。

(1) Il est arrivé porte de la Chapelle, à Paris. 「彼はパリのシャペル門に着いた」

(2) Elle est arrivée gare du Nord. 「彼女は北駅に着いた」

(3) Lorsqu'elle sortit quai Voltaire, la nuit était presque tombée.

(Musso, *Un appartement à Paris*. 2017 : 201) <sup>1</sup>

「彼女がヴォルテール河岸に出たとき、ほぼ夜になっていた」

(4) Une librairie-papeterie boulevard de Clichy restait ouverte jusqu'à une heure du matin.

(Modiano, *Dans le café de la jeunesse perdue*. 2017 : 99)

「クリシー大通りにある文房具と書籍を売っている店は午前1時まで開いていた」

(5) Boulevard Saint-Michel, des garçons et des filles se promenaient en bandes, (...)

(Beauvoir, *Mémoires d'une jeune fille rangée*. : 174)

「サン・ミッシェル大通りでは男の子や女の子が連れだって散歩していた」

(6) Pour acheter ses Gauloises bleues, mon paternel m'envoyait au Khédivé qui faisait tabac, place Gambetta : (...). (Khédivé はカフェの名前)

(Mordillat, *Rue des Rigoles*. 2002 : 190)

<sup>1</sup> 例文の引用文献については紙幅の関係で詳細は省略する。原則としてポケット版を用いている。出典がない例文はネットなどで採録したものであり、適宜、不必要な部分は省略をしている。

「青箱のゴーロワーズを買うために親父は私をタバコも売っているガンベッタ広場にあるカフェのケディヴに行かせたものだった」

(1)(2)であれば *il est arrivé à la porte de la Chapelle, elle est arrivée à la gare du Nord* のように前置詞 *à* と場所名詞の前には定冠詞を用いて表現することもできる。(3)であれば *elle sortit sur le quai Voltaire* のように前置詞 *sur* と定冠詞を用いて表現をすることができる。*arriver* も *sortir* も移動を表わす自動詞であり、移動先を表示するには通常は *à, sur, dans* などの前置詞を用いる。(4)のような場合は店や住居など事物の存在点、(5)の場合は発話の枠組みとして事態の生起する場所を表わしており *sur le boulevard de Clichy* や *sur le boulevard Saint-Michel* のようにも表わすことができる。(6)は他動詞構文の場所補語であり *sur la place Gambette* のように *sur* を用いて表現することもできる。

本稿では先行研究を踏まえつつ、このような現象についてより詳細な考察を行なうとともに、これまでの研究ではあまり触れられてこなかった問題についても考えたい。

## 2. 先行研究と現象の確認

この現象については中尾(1999)が論じており、先行研究の Palm(1989)<sup>2</sup>、Barb  ris(1997)についても引用や紹介がなされている。最初に中尾(1999)などを参考にこの表現形式に関して幾つかの確認を行なっておく。以下この表現形式を Barb  ris(1997)および中尾(1999)にならって *rue X* 形式、前置詞と冠詞がある場合を *dans la rue X* 形式と呼ぶ。

*rue X* 形式は(1)-(3)のように移動先を表わす場合、(4)のように存在場所を表わす場合、(5)のように事態の生起する場所をトピック的に表わす場合、(6)のように他動詞構文の場所補語として用いられる場合、さらに以下の(7)のように移動動詞から派生した名詞の持つ「移動」の意味に対応する移動先（もしくは通過点）を表わす場合がある。

(7) *Sa femme est morte, pendant la d  cennie noire, juste avant l'arriv  e d'Abdallah rue Hamani.* (舞台はアルジェリア) (Adini, *Nos richesses*. 2017 :19)

「彼の妻は暗黒の10年時代に、アブダラがハマニ通りに越してくる直前に亡くなった」

次に、*rue X* 形式で用いられる名詞には制限がある。中尾氏が *rue X* 形式での使用を確認したとして挙げているのは以下の名詞である。

(8) *avenue, boulevard, cour, gare, impasse, parc, place, porte, quai, rue*<sup>3</sup>

さらに中尾氏によれば Palm(1989)には *all  e, carrefour, passage, promenade, square* も挙げられている。筆者も(8)の名詞以外に *square* と *passage* の例を採録している。*square* は *parc* の類語であり、*passage* はアーケードのある *rue* である。中尾氏は(8)に挙げた名詞を *gare, parc* をのぞけば住所に用いられる名詞であると特徴付けている。確かに筆者が採録し

<sup>2</sup> Palm(1989)は未見であり、この文献についての情報は中尾(1999)による。

<sup>3</sup> 中尾氏は今後、類推によって *rue X* 形式で用いられる名詞が増える可能性があり、(8)と Palm が挙げている名詞が作るリストは開かれたリストであるとしている。このリストにまだ漏れている語が存在する可能性はあるが、今のところあらたな語が増える兆候は見られず、筆者はこのリストはほぼ閉じられたものと考えている。Barb  ris(1997)が指摘している *guichet, voie, quai, chapitre, page* などが *rue X* 形式のように用いられる現象があるが、これらについては共起する動詞（構文）や文脈が限られており、本稿で扱っている問題と何らかの関連はあっても筆者は別の問題と考える。



た square と passage も住所に用いられる名詞である。

これに対して、rue X 形式に用いられることが「ほとんど不可能」な場所名詞として中尾氏は pont<sup>4</sup>, chaussée, quartier, hôpital, musée, île, autoroute を挙げている。

移動先を表わす rue X と共に用いられる動詞については特に制限はないようであるが、筆者が採録した例文に出現する動詞を中心に挙げると aller, arriver, sortir, s'engager, déboucher, revenir, emménager, être de retour, descendre などがある。

中尾氏は場所の移動が問題になっているような文脈では dans la rue X の形式が用いられることが多く、特に s'engager, s'avancer, aboutir, arriver などがあるような文脈で用いられている場合には dans la rue X と相性が良いとしている。これは移動先が発話の焦点になっている場合は dans la rue X 形式が用いられることが多いということだろう。

中尾氏によれば Palm は「courir や rouler のように到達点を含まない移動を示す場合は dans la rue X の方が補語として選ばれ易いと指摘している」(中尾：41) とのことである。中尾氏はそう述べた箇所では次の例を Palm から引用している。

(9) ils roulaient vers la rue de Berri. (Palm : 63, 中尾 : 41)

ただ rue X 形式に対応する dans la rue X 形式の前置詞として想定されるのは à, dans, sur などであって、移動先を表わすのでもなくまた存在や事態の生起の場所を表わすのでもない vers はもともと rue X 形式は取れない。つまり(9)の意味はもともと rue X 形式では表わせないで rue X 形式との比較で Palm がこの例を挙げている意図がよく分からない<sup>5</sup>。

courir や rouler, circuler などが表わす到達点を含まない移動も一つの事態であり、Palm の言に拘わらずそのような動詞が rue X 形式を取る例は数多く見つかる。

(10) Dans un autre cauchemar, il *courait rue Amherst*, en direction de l'arrêt de tramway de la rue Cherrier. (舞台はモントリオール)

「(...) 彼はアマスト通りをシェリエ通りの路面電車の駅の方向に走っていた」

(11) Il *roulait rue Moyenne* avec plus de deux grammes d'alcool dans le sang.

「彼は血中に 2 グラム以上のアルコールを含む状態で M 通りを車で走っていた」

(12) (...) il *avait rôdé rue Saint-Benoît* dans les jours qui suivirent (...)

(Modiano, *Dans le café de la jeunesse perdue*. 2017 : 27 )

「そのあとの日々、彼はサンブノワ通りを徘徊したのだった」

(13) Le baron Haussmann a fait un cauchemar : il *se promenait avenue Daumesnil* entre le boulevard Soult et la rue du colonel Oudot (...).

「(...) 彼はスルト大通りとウド連隊長通りの間のドメニル大通りを散歩していた」

(14) J'ai éprouvé une drôle de sensation *en marchant* le matin *square Cambronne*, puisque c'était toujours la nuit que nous allions chez Guy de Vere.

<sup>4</sup> 筆者は pont X を 2 例採録している。例(20)を参照されたい。

<sup>5</sup> 本稿では rue X 形式に用いられる場所名詞だけについて dans la rue X 形式を対比させている。Palm (および中尾氏) は dans la rue X 形式を前置詞を取るすべての場所名詞に対応させているように思われる。

(Modiano, *Dans le café de la jeunesse perdue*.2017 : 116)

「朝にカンブロンヌ公園を歩いていて奇妙な感じがした、というのも (...)」

上記の例や例(5)における *courir*, *rouler*, *rôder*, *marcher*, *se promener* などの動詞はいずれも以下の例の *dîner* と同様にある場所で起こる一つの事態を表わしている。

(15) (...) nous *avons dîné* avec Jeannette Gaul *rue d'Argentine*, dans le restaurant délabré à côté de mon hôtel.

(Modiano, *Dans le café de la jeunesse perdue*. 2017 : 122)

「私たちはジャネット・ゴルと一緒にアルゼンチン通りで私のホテルの横にあるみすぼらしいレストランで夕食をとった」

到達点を含まない移動を表わす動詞が *rue X* 形式を取る場合は、移動を一つの事態として表わしているので、一部は大過去、そして多くの場合は半過去で用いられている。ただし *courir* については以下のような複合過去の例が見つかる。

(16) A toute vitesse, il *a couru rue de la Fontaine* où il a retrouvé Eléonore qui l'attendait, anxieuse.

「大急ぎで彼は la F 通りへと駆けつけ、心配して彼を待っていた E と合流した」

(17) C'est sans surprise qu'il *a couru rue Adrien Dubouché* pour goûter aux plats de chez Nomade. (chez Nomade 「ノマッド亭」はレストランの名前)

「彼が N の料理を味わうために AD 通りへと駆けつけたのはなんの不思議もない」

以上の *courir* は(10)の *courir* 「走る」とは違い、「ある場所へ駆けつける」という完了的な意味で用いられている。つまり事態の生起場所としてではなく、移動先として *rue X* 形式を取っている。*rue* は一定の長さを持っているが、(16)では *rue de la Fontaine* は Eléonore が待っているアパートマンを、(17)では *rue Adrien Dubouché* は「ノマッド亭」というレストランをメトニミー的に指示していて、通り全体を問題としているのではない。

### 3. 問題点

#### 3. 1. côté タイプ、façon タイプとの比較

冒頭でも触れたようにフランス語には前置詞と定冠詞が省略されて、*côté* や *façon* などの名詞が前置詞の働きをしている表現が存在しており、先行研究においてもそれらの表現と *rue X* 形式との違いについての言及がある。詳しくは春木(2016)を見ていただきたいが、*côté*, *niveau*, *question* などは「～については」と命題の有効性の領域を限定する働きがあり、一方 *façon*, *genre*, *style* などは「～のような、～式の、～的な」と類似性を通して対象の質的限定を行なう働きがある。いずれのタイプも名詞が文法化によって機能語化したものである。元来は *du côté de la nourriture* 「食べ物については」のように前置詞句だった表現が、前置詞句の中心となる名詞の前後の前置詞と定冠詞が省略されて前置詞句の中心的名詞そのものが前置詞の機能を果たすようになったものと考えられる。*question* のように対応する前置詞句が特定できないが類似語の文法化の流れの中にいわば取り込まれて同

じように機能語化したものもあるが、概ね元の前置詞句と今も競合的に用いられている。

rue X 形式と dans la rue X 形式も競合的に用いられているところは côté タイプや façon タイプと同じであるが、既に指摘されているように根本的な違いがある<sup>6</sup>。それは rue X が全体として固有名詞的に地名を指示している点である。niveau nourriture は「食べ物 nourriture」「については niveau」と二つの部分に分けることができる。ここでは niveau は文法化を経て前置詞として用いられており、nourriture は前置詞 niveau の支配を受ける被制辞である。一方、rue X 形式の rue の部分に入る名詞は一定の形をした場所を表わす名詞として機能しており、その名詞が前置詞的な働きをしているわけではないし、X は rue を特定化しており rue の被制辞ではない。

つまり統語的に rue X 形式と côté タイプや façon タイプは本質的に異なっている。

### 3. 2. rue X 形式とメトニミー

意味的に見た場合、façon タイプの前置詞的な用法<sup>7</sup>や côté タイプの用法については、それらが競合する本来の前置詞と冠詞を用いた表現との間に意味上の違いは存在しない。一方、rue X 形式と dans la rue X 形式も場所そのものを指す場合は意味的に等価である。しかし中尾(1999)が指摘して検討しているように rue X 形式はその場所に存在する人や物(住居、レストラン、会社などの組織)をメトニミー的に指示することができる。それに対して dans la rue X 形式ではメトニミー的な用法は難しい<sup>8</sup>。ここまでに挙げた rue X 形式の例を見ると(7)(16)は住居を、(15)(17)はレストランをメトニミー的に指示している。

問題は dans la rue X 形式ではメトニミー的な用法が可能ではなく、rue X 形式はメトニミー的な用法が可能であるのはなぜかという点である。中尾(1999)はこの点に関して、rue X 形式に用いられる名詞は主として住所に用いられる名詞であるが<sup>9</sup>、「住所の地名はメトニミーに転じやすいので、rue X はメトニミーに適した形式である」(中尾：47)と指摘している。しかし、「住所の地名はメトニミーに転じやすい」のならば rue X 形式で用いられる同じ「住所の地名」が dans la rue X 形式で用いられてもメトニミー的な意味を表わせることになるのではないかと思われる。この点に関して中尾氏は、rue X 形式は dans la rue X 形式よりも軽い形式であり、「重い形式の dans la rue X をあえて誰もメトニミーに使うとしないのは理に叶っているように考えられる」(中尾：47)と述べている。残念ながら中尾氏のこの説明は直感的、主観的であって論理的に成立しているとはいえない。dans la rue X 形式がメトニミー的に用いられないのは重い形式であるからということではなく、前

<sup>6</sup> 中尾(1999)では côté タイプと rue X 形式について「動詞補語または文補語として機能する」場合は共に c'est...que によって焦点化できる点では、「統辞的には主文に従属した前置詞句として等価に機能するという共通点をもつことがわかる」(中尾：43)と述べている。中尾(1999)も例(4)(7)のように名詞に同格的に用いられている場合は焦点化のテストの対象とはしていないのだが、同格的な用法も含めて、rue X 形式も côté タイプも façon タイプも c'est...que によって焦点化できない例が多いように思われる。焦点化テストをする意味およびその有効性については判断を保留したい。

<sup>7</sup> つまり genre や style の副詞的な用法やディスコースマーカー的な用法はのぞく。

<sup>8</sup> Palm、中尾(1999)が指摘しているように le Quai d'Orsay「外務省」のように元々はメトニミーであった意味が固有名詞化している場合は dans la rue X 形式でも用いることができる。

<sup>9</sup> 中尾氏は gare や parc も「日常無冠詞で看板に表示されている」こともあり、「住所の名詞からの類推が働いて」rue X 形式で用いられていると考えている。(中尾：46)

置詞と冠詞があることで、移動先など一定の意味役割を持った具体的な場所そのものを指示することになるからである。

(18) Il n'y a personne *rue du Mont-Thabor*. L'appartement est à louer.

(Colette. *Chambre d'hôtel suivi de La Lune de pluie*. 1990 :61)

「モン・タボール通りのアパルトマンには誰もいない。借り手募集中である」

(19) Il n'y a personne dans la rue du Mont-Thabor.

(18)の *rue du Mont-Thabor* は文脈からアパルトマンを指示しているが、*dans la rue X* 形式である(19)は「モン・タボール通りには誰もいない」という意味にしか解釈できない。

続いて中尾氏は、なぜ *rue X* 形式はメトニミー的用法だけでなく、場所の指示も可能なのだろうかとの議論を続け、それは「*Rue X* が文脈に応じた対象を柔軟に指示できるからである」(中尾：47)と説明している。確かに前置詞と冠詞がない *rue X* 形式の方が統語的に抽象性が高いので指示に関して柔軟であるというのは納得できる。しかし、*rue X* 形式が *dans la rue X* 形式の前置詞と冠詞が省略されてできた形式であると考え、*rue X* 形式が本来、場所を指示できるのは当然のことであり、むしろどうして *rue X* 形式が場所の指示からメトニミー的な用法に守備範囲を拡大したのかという方向で議論すべきである。それに対する答えとしては、前置詞と冠詞がないことで *rue X* 形式はその指示において抽象性が高くなり、そのことによりメトニミー的な用法が発展してきたと考えられる。

#### 4. *rue X*：場所指示とメトニミー的用法

ここでは *rue X* 形式がメトニミー的に用いられることについてもう少し詳しく検討してみたい。まず *rue X* 形式で用いられる名詞のすべてがメトニミー的に用いられるかという点、そうではないようである。多くの例を挙げていると思われる Palm(1989)を見ていないので断定はできないが、筆者の採録例などを検討する限り、メトニミー的に用いられているのは、*rue*, *impasse*, *boulevard*, *avenue* などに限られると思われる<sup>10</sup>。いずれも番号を伴って住居表示に用いられる名詞である。メトニミー的な用法はその場所に存在する住居、レストラン、店、会社などの組織を指示するので、これは当然といえば当然である

*rue X* 形式で用いられるその他の名詞にメトニミー的な用法があるとすると、それは *parc X*, *square X*, *pont X* などの形で *X* 公園のそば、*X* 橋のたもとというような地理的隣接性という意味でのメトニミーになると考えられる<sup>11</sup>。以下はかなり稀な *pont X* の例である。

(20) Le théâtre flottant l'Ile'O est arrivé *pont Gallieni* le 5 octobre 2022.

「浮かぶ劇場 Ile'O は 2022 年 10 月 5 日にガリエニ橋（のたもと）に着いた」

この文はネットの新聞記事に付けられた写真のキャプションであるが、記事本文では以下

<sup>10</sup> 実例は採録していないが、住所に用いられる *quai*, *place*, *passage* も含まれる可能性がある。

<sup>11</sup> たとえば *X* 公園でイベントをしていて、臨時に屋台などを出しているとかテントで何か対面的なサービスをしているような状況で、そのことが文脈的・状況的に分명한場合は *rue X* 形式で住居や店を指示する場合と同様のメトニミー用法が成立すると考えられるが、実例を採録するには至っていない。

の様に dans la rue X 形式で橋のそばであることが説明されている<sup>12</sup>。

(21) Le théâtre flottant l'Ile'O (...) est arrivé ce mercredi 5 octobre *au pied du pont Gallieni, berge Von Suttner*. 「ガリエニ橋のたもと、Von Suttner 堤に着いた」

さて、rue X 形式のメトニミー的用法に話を戻そう。実例を検討していると場所自体を指示しているのかメトニミー的用法なのか判断しがたい曖昧な例が意外に多いことに気付く。

(22) Voilà près d'un an et demie que nous avons emménagé *impasse des Colibris*.

(V. Grimaldi, *Quand nos souvenirs viendront danser*. 2019 : 36)

「私たちがハチドリ袋小路に引っ越してきてからもう 1 年半近くたった」

(23) Une génération s'est écoulée depuis notre arrivée *impasse des Colibris*.

(V. Grimaldi, *Quand nos souvenirs viendront danser*. 2019 : 168)

「私たちがハチドリ袋小路に引っ越してきてから一世代の年月がたった」

上記の 2 例においては「引っ越してきた」という言葉からも分かるように、話し手達が住んでいる住居をメトニミー的に指示していると先ず考えられるが、しかし同時に一つのコミュニティの存在する袋小路全体を指示しているとも考えることもできる<sup>13</sup>。その場合も単に場所を指示しているだけではなく、文脈からそこに住む住民達のコミュニティをメトニミー的に指示していると考えられる。つまり rue X 形式のメトニミー的用法には、その rue X に住む人々、コミュニティを広く指示するタイプもあると考えられる。

また移動先の場所自体を指示する場合も、rue X の特定の場所を指示する場合と、(rue X 以外の場所と比較して) rue X の任意の場所、もしくは地域としての rue X (全体) を指示する場合とが存在する。以下の例が任意の場所を指示する例である。

(24) Le taxi s'est engagé *rue de la Chaussée-d'Antin* et j'ai vu, tout au fond, la masse noire de l'église de la Trinité, (...)

(Modiano, *Dans le café de la jeunesse perdue*. 2017 : 74)

「タクシーはラ・ショセ＝ダンタン通りに入り、私にはずっと奥にトリニテ教会の黒いシルエットが見えた」

この例ではどこか他の通りからラ・ショセ＝ダンタン通りに入ったことを表わしており、トリニテ教会が奥に見えるという制限はあるものの、通りのどこかを特定して指示しているのではない。s'engager や déboucher などがこのタイプで用いられる典型的な動詞であるが、atteindre の意味で用いられている arriver にもこの種の用例がある。

rue X 形式の指示対象が場所自体なのかメトニミー的なものなのかが曖昧な例をさらに見てみよう。

(25) Je levais les enfants, je les habillais, (...), je les emmenais à l'école, je buvais un café *rue Soufflot* en feuilletant le journal, (...), je retournais les chercher *rue Cujas*, (...).  
(Gavalda, *fendre l'armure*. 2017 : 52)

<sup>12</sup> au pied du pont Gallieni の後に berge Von Suttner と同格的に berge X が付いていることにも注意。

<sup>13</sup> 小説ではこの袋小路に住む人々に起きることや、その人達の間で起きることなどが描かれている。

「私は子供達を起こし、服を着せ、(...)、学校に連れて行き、スフロ通りで新聞を読みながらコーヒーを飲み、(...)、子供達をキュジャ（ス）通りに迎えに行き(...)」

この例では *rue Cujas* は学校のことを指示しているのは明らかだが、*rue Soufflot* はこれだけでは行きつけの特定のカフェを指示しているのか、通りにある任意のカフェを指しているのかは曖昧である。先行文脈にもその通りの特定のカフェのことは出てこない。この例は半過去の使用から分かるようにある時期の毎日の行動を述べているので、行きつけのカフェを指示している可能性が高いが日によってスフロ通りの違うカフェに入るのかも知れない。いずれにしる曖昧なままでも理解に問題はない。この種の例は意外と多く存在しており、指示対象が曖昧なままでも抵抗なく受容できてしまう。

*rue X* 形式の例の中には *rue X* の後に前置詞を伴ってより具体的な場所の説明が続くものも存在する。((15)は再録なので訳は省略する)

(15) (...) nous avons dîné avec Jeannette Gaul *rue d'Argentine, dans le restaurant délabré à côté de mon hôtel.*

(26) Suzanne travaillait *avenue de l'Opéra, dans une maison très chic* où elle tenait le poste de standardiste. (G.Mordillat, *Rue des Rigoles*. 2002 :153)

「シュザンヌはオペラ大通りのとても素敵なお店で電話交換手の仕事をしていた」

いずれの例においても、*dans* 以下の説明が続くことで *rue X* の部分は単にレストランやお店のある通り、つまり地域を特定しているだけと解釈できる。ただ、*dans* 以下のより具体的な場所の説明がない場合は、*rue d'Argentine* はレストランを、*avenue de l'Opéra* はなんらかの店をメトニミー的に指示していると解釈すべきであろうか。*rue d'Argentine* はこの話の中では何度も出てきており既知の通りである。一方、*avenue de l'Opéra* はよく知られた通りであり一定のイメージを喚起する。このような場合はむしろ地域としての場所自体を指示していると解釈すべきであるように考えられる。例(27)のように *rue X* の後にカフェとバーの2箇所が具体的な場所として示されている場合は、*rue Saint-Benoît* は明らかに場所としての通り、一つの地域を指示しているだけである。

(27) Il le connaissait de manière superficielle, pour l'avoir souvent croisé *rue Saint-Benoît* à La Malène et au bar du Montana (...). (La Malène はカフェの名前)  
(Modiano, *Dans le café de la jeunesse perdue*. 2017 : 25)

「彼はその人のことは、サンブノワ通りのラ・マレーヌとモンタナバーでよく行き会ったことがあったものの、顔見知り程度にしか知らなかった」

ついでながら以下の例(28)では前置詞句と *rue X* の位置が逆であるが、これは(4)と同じく名詞に後続して存在場所を表わす *rue X* になる。

(28) Déjeuner *dans un petit restaurant rue des Canettes*. Il y avait Soupault, Amrouche, Roblès, Aury, (...). (Adini, *Nos richesses*. 2017 :114)

「カネット通りの小さなレストランでランチ。S と A, R, A (...) がいた」

## 5. rue X 形式の成立要因

Barb  ris(1997)は rue X の例として動詞 *habiter* 「住む」の以下の例を挙げている。

(29) Louis habite *rue de l'Ancien Courrier*. 「ルイは A.C.通りに住んでいる」

*habiter* は自動詞としては前置詞 *  * や *dans* を取る。(29)も Louis habite *dans la rue de l'Ancien Courrier*. と言うこともできるが、日常語においては基本的には(29)のように言う。一見すると rue X 形式と *dans la rue X* 形式の対立のように見えるが、*habiter* には他動詞用法もあり、以下のように実態はやや複雑である<sup>14</sup>。

(30) J'habite *33 rue de Zurich*    Strasbourg.<sup>15</sup>

「私はストラスブールのチューリッヒ通り 33 号に住んでいる」

(31) J'habite *au 33 rue de Zurich*    Strasbourg.

(32) J'habite *la rue de Zurich*    Strasbourg.

まず(30)のように rue X の前に番地の数字を入れることができる。番地の前に前置詞を用いる場合は定冠詞を取り(31)のようになる。さらに番地がない場合、(32)のように定冠詞を伴うこともできる。しかし最も頻度が高いのは(29)のタイプの構文である。rue X 形式が現在のように発展した理由はいくつか考えることができるが、その一つに(29)のような *habiter* の構文の影響があるのではないだろうか。*habiter* はまさに住所を述べる基本的な動詞であり、*habiter rue X* 構文は頻度も高い。そもそも(29)のような発話は *habiter* の他動詞用法というよりも rue X 形式と同じタイプの構文とネイティヴには感じられているのではないだろうか。Barb  ris(1997)が rue X の例として(29)を挙げているのも、ネイティヴとしてそのような感覚があるからではないかと推察される。

*habiter* 構文や rue X 形式で定冠詞が落ちるのは、既に指摘されているように住居表示のパネルに *rue Vaugelas* のように無冠詞の形で書かれていること、郵便物その他に住所を書く場合も冠詞をつけないことなどから、日常的に冠詞のない形を見慣れていること、さらに意味的には rue X は全体として固有名詞と見なすことができることから説明できる。

既に述べたように場所補語として、移動先や存在場所、事態の生起する場所というのは起点に対して無標である。住所に使われる名詞が指示する場所というのは、そこに人が住み、カフェやレストラン、あるいはお店があり、会社その他の組織があるので、移動先や存在場所、事態の生起する場所として用いられることが多く、そのような場所として認識されやすい。そこからそれらの名詞の前の前置詞の役割が言わば軽減され、意味的に余剰が生み出され、言語の経済性から前置詞が省略されるようになったものと考えられる<sup>16</sup>。

なお、例(5)のように発話の枠組み的に rue X が発話の頭にある場合は、文の構成要素がトピックとして左方遊離される場合に前置詞を省略することができる現象とも関連して、

<sup>14</sup> *habiter la rueX* という形は中尾氏も述べているように例が少ない。X 部分のない *habiter la rue* は成句的に「路上生活をしている」という意味になることがこのタイプの例が稀である原因かもしれない。

<sup>15</sup> Barb  ris にもあるように、住所を述べる場合は *j'ai   t   longtemps 33 rue de Zurich*. のように *  tre rue X* も可能。

<sup>16</sup> 日本語においても日常語では移動先 (例: 「明日京都行くねん」「鍵ここ置いとくよ」) を表わす助詞 (加えて方言によっては存在場所 (例: 「その本ここあるよ」) を表わす助詞) は省略されることが多い。

rue X 形式が受容されやすいと考えることができる。

また(6)(25)(27)のように他動詞を用いた発話の場所補語として rue X が用いられる場合は、時間補語が前置詞を取らずに副詞的に用いられることが多いということとも合わせて考えるべきであろう。いずれにしる場所と時間は発話が表わす事態に本質的に内在する意味要素であり、その点において関係を表わす明示的な要素がなくとも認知し易いと言える<sup>17</sup>。

なお、Barb ris は rue X 形式の成立にその場所が慣れ親しんだ既知の場所(un espace familier, d j  construit)であることが条件であるとしている。中尾氏はそれは rue X の使用の決定的な要因ではないと批判しているが、筆者も同意見である。

## 6. まとめに換えて：rue X 構文の成立

c t タイプ、fa onタイプ、あるいは色彩のニュアンスを導入する couleur の構文においては名詞が文法化を経て機能語化していた。一方、rue X 形式においては rue の部分に入る rue, boulevard, avenue, place などの名詞は名詞本来の意味を維持しており、前置詞的な機能語の働きをしているわけではない。対応する dans la rue X 形式において前置詞が表わしている方向格や場所格（位格）的な意味は、動詞の持つ構文的枠組みや発話全体の意味から rue X 形式全体に付与されているのである。それは rue, boulevard など住所に用いられる場所名詞の指示対象は、移動先や何かの存在場所、事態の生起する舞台として想定され得る特権的な位置を占めているからである。今では rue X 形式は方向格や場所格（位格）的な意味を持った rue X 構文として成立しているのである。おそらく最初は移動動詞や habiter などと共に用いられる dans la rue X 形式において、前置詞が意味的に余剰を生み出して rue X 構文が成立し、次第にその使用範囲を拡大していったと考えられる。そして一方では指示対象に関してメトニミー的な用法が発展したのである。

### 参考文献

- Barb ris, J.-M. (1997) : “ ‘ Rue X ’ : La gramm misation   l’ uvre dans la parole ” , *Faits de Langues*, no.9 : 165-174.
- Palm, L. (1989) : “ *On va   la Mouff?* ” * tude sur la syntaxe des noms de rues en fran ais contemporain*. Uppsala, Acta Universitatis Upsaliensis.
- 中尾和美 (1999) : “ Rue X ” について『フランス語学研究』第 33 号（日本フランス語学会） : 40-51.
- 春木仁孝 (2016) : 「話し言葉における名詞の機能語化について－c t , question, fa on, genre, style, histoire de, etc.－」『フランス語学の最前線』第 4 巻（ひつじ書房） : 85-125.
- 春木仁孝 (2023) : 「現代フランス語における二次的な色彩を表わす表現について－couleur を中心に－」『時空と認知の言語学 XII』（大阪大学大学院人文学研究科）web 出版、大阪大学学術情報庫 OUKA gbkp\_2022\_j\_040.pdf : 40-49.

<sup>17</sup> また、焦点でない場所補語の場合は役割の軽さ故に rue X 形式を受け入れやすかったとも考えられる。



執筆者紹介（掲載順）

田村幸誠（TAMURA, Yukishige）

人文学研究科言語文化学専攻 言語認知科学講座

松浦幸祐（MATSUURA, Kosuke）

日本語日本文化教育センター

春木仁孝（HARUKI, Yoshitaka）

大阪大学名誉教授

（2025 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2024

時空と認知の言語学 XIV

2025 年 5 月 31 日 発行

編集発行者

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻